

Buzz MK Racing
SUPER FORMULA

S U P E R
FORMULA

RACE REPORT

Round 09-10
FUJI

10-11 October 2026



波乱のレースを乗り越え、最後尾からポイント獲得。 粘り強い戦いで成長の証を刻んだ富士大会

前戦の SUGO 大会は、ドライバーのロマン・スネックが体調不良という厳しい状況に見舞われながらも、予選では Q2 進出まであと一歩に迫る走りを見せた。決勝では体調の兼ね合いから完走できるかという懸念もあったが、不安を払拭するかのように、上位勢にも引けを取らないペースで周回を重ねた。結果的にはチームとして初めてのリタイアとなったものの、レースペースやクルマのセットアップには確かな手応えを掴んでいる。

開幕戦から積み重ねてきた改善が少しずつ形となりつつあり、チームとしても後半戦にしっかりと結果を残すべく、我々ナビクル Buzz MK RACING は今季2度目の開催となる富士スピードウェイで開催された第9・10戦富士大会に歩みを進めた。

FREE PRACTICE

今シーズンは不安定な天候に見舞われる大会も多かったが、今回の富士スピードウェイは搬入日から絶好の天候に恵まれた。前回の富士大会と比べると秋の訪れを感じさせる気候となり、朝夕には気温が下がり、肌寒さを感じるほど。そんな秋晴れの下、9日（金）から走行がスタートした。午前に行われた1時間のフリー走行1回目では、前戦 SUGO 大会で掴んだ好感触を維持し、スタネックは1分23秒119をマーク。トップから0.539秒差の13番手につけ、上々の滑り出しを見せた。ロングランでも安定したペースを刻み、スタネックも「走り始めはとても良く、ロングランのシミュレーションでも決勝に向けてとても良い手応えがありました」と明るい表情で振り返った。チームとしても確かな手応えを得られたことから、午後のセッションではさらなるパフォーマンス向上を目指し、セットアップに変更を加えてフリー走行2回目へと臨んだ。

Rd.9 QUALIFYING

迎えた第9戦開催日も、早朝はやや肌寒さを感じられたものの、時間が経つにつれて明るい日差しが差し込み、穏やかな天候となった。チームは前日のフリー走行1回目で得られた好感触を取り戻すべく、セットアップを元の状態へと戻して予選に臨むことを決断。気温21度/路面温度30度と前日から大きな変化のないコンディションのなか、スタネックは予選Q1 B組に出走した。今回のセットアップでは、タイヤに過度な負担をかけ過ぎず、丁寧にウォームアップを進めることが重要だと判断。チームとスタネックで話し合いを重ね、通常よりもウォームアップラップを1周増やす戦略を選択した。スタネックもその方針にしっかりと順応し、3周をかけて慎重にタイヤを温めると、渾身のタイムアタックへと臨んだ。アタックラップでは、各セクターで自己ベストを刻み、1分22秒745をマーク。



ところが、午後のセッションでは色々とセットアップを試し、31周と多くの周回を重ねたものの、午前ほどの好感触を得ることができず、思うようにペースを伸ばせない展開となった。スタネックの持ち味やクルマのポテンシャルを十分に引き出すことができず、セッション終盤に行われた10分間のA・B組み分け走行では、ニュータイヤを投入して予選を想定したアタックシミュレーションに臨んだものの、一発の速さを発揮するには至らなかった。最終的に自己ベストは1分23秒738、トップから1.186秒差となり、午前の好調さから一転、課題を残す結果となった。チームはエンジニアやメカニックを交えてミーティングを重ね、午前と午後の走行データを丁寧に比較、分析。セットアップの方向性を改めて見直し、翌日の第9戦に向けてパフォーマンスを最大限に引き出すべく、準備を進めていった。



しかし、タイヤの内圧を十分に上げ切れず、本来のポテンシャルを発揮するには至らなかった。最終的に11番手となり、Q2進出ラインまで0.384秒及ばずQ1敗退。第9戦決勝は22番グリッドからのスタートが決まった。長谷川監督も「とても丁寧にタイヤを温めてくれたので良かった部分はありませんが、少し内圧を上げきれず、Q2にはわずかに届きませんでした。ポテンシャルはあったけどもったいないことをしました」と悔しさをにじませた。富士スピードウェイは、今季第6戦予選でチーム最高位となる5番手グリッドを獲得した舞台。それだけに期待も大きかったが、思い描いていた結果には届かなかった。それでも、前日の走行ではロングランで確かな手応えを得ており、決勝での巻き返しにも可能性は十分に残されている。後方からのスタートという厳しい状況ではあるものの、ひとつでも多くポジションを上げるべく、チーム一丸となって最終調整を進め、午後の決勝レースへと備えた。

Rd.9 RACE

予選と決勝のインターバルに実施されたピットウォークではチームのピットにマルチン・クルチャル駐日チェコ大使が訪問。チェコ出身のスタネックを激励するとともに、さまざまな会話を交えながら、SUPER FORMULA での活動について報告する貴重な機会となった。さらに決勝前のスターティンググリッドにも駆けつけて頂き、スタネックの戦いを温かく見守っていただいた。その声援を胸に、22番グリッドからスタートを切ったスタネックは、抜群の反応を見せて好スタートを決める。1コーナーまでに2台を捉えると、さらにもう1台を抜き取り、オープニングラップで一気に19番手へ浮上。翌周には18番手まで追い上げ、序盤から力強い追い上げを見せた。チームもその勢いを確かな結果へとつなげるべく、ライバル勢の動向を見極めながら、ピットインのタイミングを慎重に探っていた。11周目にピットウインドウが開くと、多くの車両がコース上にとどまる戦略を選択。そこで我々は、ライバル勢に先んじて動くことでポジションアップを狙い、翌12周目にピットインすることを決断した。

メカニック陣の迅速かつ確実なタイヤ交換でコースへ戻ったスタネックは、フレッシュタイヤを活かしてプッシュを続け、29周目に全車がピット作業を終えた時点で16番手まで浮上。チームの戦略がポジションアップにつながった。しかし、早めのタイヤ交換が影響し、終盤はタイヤの摩耗に苦しむ展開に。

Rd.10 QUALIFYING

ウイーク最終日も富士山に雲ひとつかからないほどの青空が広がり、富士スピードウェイは絶好の天候に恵まれた。前日より気温が上昇し、少し歩くだけで汗ばむほどの暖かさを感じるなか、気温23度/路面温度32度というコンディションで第10戦の予選がスタートした。



レースペース自体は決して悪くなかったものの、後続の2台に先行を許して18番手へと後退。それでもスタネックは残されたタイヤの状態を見極めながら、最後まで粘り強く周回を重ね、無事にチェッカーを受けた。その後、上位車両にペナルティが科されたことで、最終結果は17位となった。

ポイント獲得には届かなかったものの、22番手からスタートという厳しい状況でも、スタネックは積極的なオーバーテイクを披露し、随所で確かな速さを示した。チームとしても、ピット戦略もうまく機能し、レースペースにも少しずつ手応えを得つつある一方、終盤のタイヤマネジメントには課題を残した。上位グリッドからスタートできれば、ポイント圏内での戦いも十分に狙えるはずだ。翌日の第10戦では予選から流れを掴みたいところ。そんな思いを胸に、翌日の第10戦へと気持ちを切り替えた。

Q1 A組に出走したスタネックは、前日と同様に3周をかけてタイヤをウォームアップし、最後のアタックラップへと臨んだ。しかし、アドバンコーナーの立ち上がりでタイヤがわずかにホワイトラインの外側へとみ出してしまい、痛恨の走路外走行に。1分23秒369をマークしたものの、このタイムは抹消され、4周目に記録した1分33秒031がベストタイムとして採用されることになった。結果としてQ1敗退となり、決勝は最後尾グリッドからのスタートが決まった。前日の第9戦では22番手から力強い追い上げを見せ、レースペースにも手応えを得ていただけに、予選順位の重要性を認識して臨んだ第10戦だったが、再び厳しい結果となってしまった。スタネックもチームも悔しさを隠せなかったものの、クルマのポテンシャルや決勝でのレースペースには自信を持っている。後方からの追い上げを再び見せられるか。チーム全員気持ちを切り替え、決勝での反撃に望みを託した。

Rd.10 RACE

いよいよ週末最後のレースとなる第10戦決勝を迎えた。気温 25 度／路面温度 34 度と前日とほぼ同様のコンディションのなか、最後尾からスタートしたスタネックは抜群の蹴り出しを見せ、オープニングラップで 20 番手へ浮上。4 号車の笹原右京選手とポジション争いを繰り広げ、4 周目まで 20 番手を守り切った。しかし、5 周目には上位勢の接触によりセーフティカー（SC）が導入される。スタネックはタイヤを労わりながら周回を重ね、9 周目のリスタートでも順位をキープした。チームは前日と同様にアンダーカットを狙い、ピットウインドウが開いた 11 周目終了時点でピットインを決断。メカニックススタッフの最高の迅速なタイヤ交換を終えて順位を上げてセカンドスティントに入ると、スタネックは 1 分 25 秒台前半の好ペースで周回し、ライバルとのギャップを縮めていった。セクター 3 ではやや苦戦したものの、高速コーナーが続くセクター 2 では上位勢にも引けを取らない速さを発揮。クルマの強みを活かし、着実にレースを進めていた。

ところが 20 周目、2 度目の SC が導入されると、未交換の車両が一斉にピットへ向かい、ピットロードでは多重クラッシュが発生。混乱が広がるなかでも、スタネックは無線からの情報をもとに冷静な走行を続けた。25 周目に一度はレースが再開されたものの、再び SC が導入され、31 周目まで先導走行が続く波乱の展開となった。早めにタイヤ交換を済ませていたため、この SC による周回はタイヤライフの面で追い風となった。さらに上位勢の戦線離脱も重なり、スタネックは一時 8 番手まで浮上。チーム最高位タイ、さらにはベストリザルト更新も視野に入るポジションにつけ、ピットではクルーたちが固唾をのんで戦況を見守っていた。スタネックもその期待に応えるようにリスタートを決め、一度はライバルの攻撃を抑え切った。

しかし、想定以上にタイヤの摩耗が進んでおり、次第にペースを維持することが難しくなっていく。後続に相次いで先行を許し、惜しくもポイント圏外の 11 番手まで後退。最終ラップにはオーバーテイクシステム（OTS）を駆使して前を追ったものの、ポジションを取り戻すには至らず、11 番手でチェッカーを受けた。その後、他車にペナルティが科されたことで最終結果は 10 位となり、貴重なポイントを獲得。8 台がリタイアする波乱のサバイバルレースを最後まで走り抜き、最後尾からポイント圏内まで追いつけたことは、チームにとっても大きな収穫となった。一方で、終盤のタイヤマネジメントやライバルとの駆け引きには課題も残り、SUPER FORMULA の難しさを改めて痛感する一戦でもあった。それでも、厳しい状況のなかで冷静に戦い抜き、結果へとつなげたスタネックの走りを、長谷川監督と阿部和也エンジニアも高く評価していた。

スタネックの的確な評価とフィードバックが、ここ数戦のパフォーマンス向上につながっていると語る阿部エンジニアも「荒れたレースで最後尾からしっかりと順位を上げられたのは、チームにとってとてもポジティブです。最終戦はもう少し高いレベルのところで戦えると思いますし、まずはしっかりと予選 Q2 にギリギリでもいいから通過して、レースは絶対に毎回ポイントを取るというステップに持っていきたいです」と、今後の戦いに向けて前向きなコメントを残した。2026 年の SUPER FORMULA も、残すところあと 2 戦。参戦初年度の我々チームにとって、開幕戦から積み重ねてきた経験は着実にクルマの進化とチーム力の向上につながっている。今シーズンの集大成となる最終大会で、その成長を確かな結果として示すべく、チーム一丸となって残された戦いに挑んでいく。

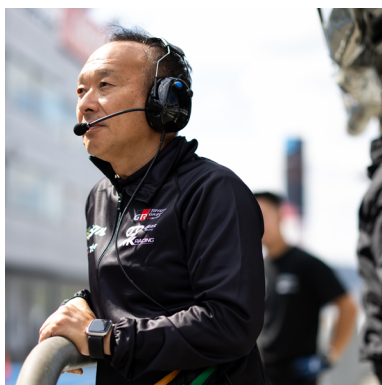


DRIVER & DIRECTOR COMMENTS



ROMAN STANEK Driver

「初日の予選シミュレーションでペースが見つからず、第9戦の予選でもその流れを変えることができずにQ1敗退となり、とても悔しかったです。レースもスタートして序盤は手応えもあり、順位も上げることはできましたが、中盤以降はペースもとても苦しい状況でした。でも、他と比べれば足りない部分も多くありますが、前回の富士大会よりは一段階レベルも高く、第10戦もクルマがとても進化していて乗りやすかったです。ただ、予選のアタックで自分がミスしてしまい、結果に反映させることはできませんでしたが、パフォーマンス向上を感じられた良い予選でした。決勝でも2戦連続で良いスタートを決めることができましたし、オーバーテイクもでき、久しぶりにレースを楽しめました。無事に1ポイントを持って帰ることができて良かったですし、学びの多いレースウィークとなりました。次戦の鈴鹿は何度走っても特別で楽しいサーキットです。次こそは予選Q2を突破して、トップ10入りできるように頑張ります」



KENICHI HASEGAWA Director

「第9戦の予選はスタネックのタイヤの温めを考慮し、ウォームアップラップを1周多く設けましたが、内圧の上がり不足に0.3秒差でQ2進出を逃すことになってしまいました。決勝でもペースこそ悪くはないものの、セクター3でタイムが伸びせない状況でしたが、うまく順位を上げることができました。順位的だけを見ると決して良いとは言えない結果ですが、うまく噛み合えば上位で争えるだけのパフォーマンス向上も感じています。しかし、第10戦に関しては予選で走路外走行となってしまいました。それがなくてもパフォーマンス不足は否めず、もう少し改善が必要だと感じています。決勝では周りの展開に助けられたのが大きかったとはいえ、何事もなくうまく切り抜けてくれましたし、スタネックの成長も感じられました。とはいえ、OTSの使い方など課題は多いので、最終戦に向けては改善をしなければなりません。また、第10戦決勝のメカニックみんなのタイヤ交換は素晴らしかったです。最高の交換を見せてくれました。そして、ポイント獲得や上位に入るためには、そういったことの積み重ねが大切です。結果につながります。ドライバー、チーム、全員一致団結し、各々の精度を高めて、最終戦の鈴鹿大会に挑みます。今大会も我々ナビクル Buzz MK RACINGのメインスポンサー様であります、ナビクルの株式会社エイチームホールディングス様をはじめ、多くの関係者の皆様に今大会も温かいご声援をいただいたこと、心より感謝申し上げます。ありがとうございます。来月はいよいよ今シーズン最終大会の地元鈴鹿大会です。今シーズンの集大成をお見せできるよう、チーム全員で頑張ります。引き続き応援のほど、よろしくお願い申し上げます」

